

令和元年度千曲市総合教育会議議事録（要約）

1. 日 時

令和元年 7 月 31 日（水） 午前 11 時から正午

2. 場 所

千曲市役所戸倉庁舎 4 階 会議室 2

3. 会議日程

- (1) 開会
- (2) 市長あいさつ
- (3) 会議事項
- (4) 閉会

4. 議 題

- (1) 教職員の働き方改革について
- (2) その他

5. 出席者

市長	岡田 昭雄
教育長	赤地 憲一
教育長職務代理者	若林 由美子
教育委員	武井 音兵衛
教育委員	坂本 孝夫
教育委員	中村 洋一
教育委員	宮入 文雄

企画政策部長	竹内 司
教育部長	滝沢 裕一
教育指導幹	青木 幸雄
教育指導幹	米澤 修一
総合政策課長	洞田 英樹
教育総務課長	高野 昌一
教育総務課	柳嶋 幸孝
総合政策課	宮下 真人

6. 議事

1. 開会 (進行：竹内企画政策部長)

2. 市長あいさつ

(岡田市長)

梅雨が明けたばかりでありまして、今日も厳しい暑さとなっております。

この総合教育会議は、市長部局と教育委員会が、同じ課題の中でどのように教育行政を進めていくかという議論をする場所です。

今回は、全国的な話題となっております、いわゆる教員の働き方改革について、当市の状況を発表して頂きます。

これは本当に大事なことで、教育の質を高めることに繋がります。そして、学校の現場がどうなっているのかということ、行政側はもとより、教育委員の皆さんにも十分に理解して頂いた上で議論して頂ければありがたいと思います。

学校現場の中のことは、なかなかはっきりとは分かりませんので、現状を教えてくださいながら、行政、教育委員会、学校、それぞれの立場から、子どもたちの教育環境をきちんと守っていくという視野に立って、この会議を進めていきたいと思っています。

今日は、課題を整理しながら現状の共有をして、逐次その内容について、皆で深めていくことができれば良いと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

3. 会議事項

(1)教職員の働き方改革について (進行：岡田市長)

○青木教育指導幹より説明

(岡田市長)

学校の現状をご説明頂きましたが、学校の先生はこんなにも忙しいのだと改めて思いました。

現在も、国が示している時間外労働の上限である、月 45 時間を約 10 時間近くオーバーしています。

ここをどうすれば良いのかと言うことですが、今、青木教育指導幹が説明されたように、学校現場によってそれぞれ状況が変わってくるので、一概には言えません。当事者である、現場の先生方はどこを改善したら良いと考えているのか。

働き方改革は、全体的に統一して行うことが非常に難しいという認識があります。教育委員の皆さんは、それぞれ学校現場を回っていますが、そのご感想をお聞きしながら議論を深めていけたらと思います。

(坂本教育委員)

労働基準法の中には労働者の定義があるが、学校の先生というのはその定義からは少し外れていると感じています。

この働き方改革は、労働基準法に定義される労働者をイメージしてプランされたものであるとい

うことを前提として、この問題を考えていかなければならないと思います。

私が学校の先生に望んでいることは、まず多様な知識を常に学んでいて欲しいということです。だから、学ぶ時間をたくさん作ってもらいたいです。

二番目は、教職員個人の日常生活に対する満足度を高めてもらいたいということです。

三つ目は、教職員の方も子育て、あるいは親の介護の問題があるので、それをストレスなくやって頂きたいということです。

しかし、資料の小学校 A 教諭のスケジュールを見ていると、何を言っているのだと言われてしまうほど忙しい。これをどうすべきか考えると、まずは教職員の意識改革が必要ではないかと思えます。意識改革することによって、学校の業務改善をどうしたら良いか、それに対する支援はどうしたら良いかが見えてくると思えます。

次にチーム体制の構築、あるいは人員の配置という問題が出てきます。加えて、学校業務の適正化、あるいは精査という問題もあるし、教職員の人材育成という問題も出てきます。

そうすると、学校の先生の多様な意見を聞いて、それをフィードバックしていくことから始める必要があるという感想を持っております。

(宮入教育委員)

私も教員でしたが、子どもたちへの責任もあり、現役時代はあまり勤務時間外労働というものを考えておらず、仕事がきついても感じていませんでした。ただ、現在の状況としては、改善していかなければいけないという気がしています。

先日、長野市の中学校で、学年担任制という、学級担任はおくが、臨機応変に皆で学年全体を見る制度が始まったという記事が載っていました。生徒は、なるべく多くの教職員の目で見ることが大事になってきているため、この制度は良いと思います。これにより保護者の方も、学級担任のせいにしにくくなっているという話も聞いています。

それから、中教審が打ち出している、小学校高学年の教科担任制というものも非常に良いと思います。今は、学級担任とそりが合わない子どもたちも増えてきていますので、いろいろな先生に教わるというのは良いことではないかと思えます。

そしてやはり、教職員の意識改革は必要だと思います。以前は、だらだらと学校にいる先生も多かったため、ある程度、自分の生活の意識改革をするのは大事だと思います。また、学校での日課や、教師の業務の見直しも必要だと思います。

(中村教育委員)

働き方改革が叫ばれていることは良いことだと思います。

以前は、夏休み中は先生方もゆっくりしてくださいという時期がありました。しかし、今は勤務することになっており、夏休み中に休む場合には、何をやってたのか書類を出せとなっています。

普段忙しいのだから、土日は完全に休まなければいけないといったような意識改革が必要です。

たとえば、夏休みは勤務しても良いが、午前中だけ仕事をしたら帰るようにできるはず。それが、何か窮屈で、通常と同じように働くことが問題です。公務員に対する風当たりが強くなった時期があったことも原因だと思います。

学校の先生にとって研修は重要だが、官制研修のような、やらされ感の強い研修が重荷になって

います。教員免許更新講習の根本的な見直しも必要であると思います。

また、食育のような「〇〇教育」といったものがたくさんありますが、そういった教育を、学校にやって欲しいという要望が多く寄せられます。その数は 40 以上もあり、教員の負担となっているため、ある程度はできませんと言うことも必要だと思えます。

本来は家庭教育ですべきことを、学校に全部任されてしまいます。また、それを学校がやってしまうことで、若い家庭が力をなくしていくことになってしまいます。

(武井教育委員)

昔は校長先生や教頭先生が教室にいと一般教員は帰ることができず、じっと時間を過ごして、先に帰るのを待っていました。現在はそんなことはないと思いますが、根底にはそういうものがあるのではないかと思います。

仕事量が増えて、こなしきれないから持ち帰りとなるのであれば、仕事量を減らすしかない。授業を増やすなどということになります。スクールサポートスタッフのこともそこに繋がってきます。

組織としては、一旦行事等を増やすと、再検討してそれを減らすということが非常にやりにくいものが多い。しかし、もう一度いろいろなものを精査して、本当に継続すべきものなのかを考えていくべきです。

また、今の時勢として、多くのものを書類で残す必要があり、その作成に時間がかかっている点も見直す必要があります。

(若林教育長職務代理者)

学校の先生が、家庭に仕事を持ち帰る平均時間について、小学校の先生は若い女性が多い中で、中学校もそうですが、子どもがいる、家庭を持っているということもあって、家に持ち帰る率が高いです。

一方で、中学校の先生は、学校での休日勤務、時間外の勤務が多くなってきます。

この時代、いろいろなことで忙しくなって、子どもの教育に関係するすべてが、学校にのしかかってきます。それを取り上げて、時間をかけてやるのではなく、授業で子どもたちに話す中で、少しずつ触れていくことはできると思います。

仕事は割り切って、仕事の処理を時間内にシビアにやる。業務改善への意識改革というものが教員の中にもしっかり根付いて行って欲しいです。余裕をもって授業をする、そして子どもたちの前に生き生きとした姿で立って頂きたいと思えます。

中学校の部活動では、一部で指導員の導入が始まっており、社会体育の方に部活動を任せていく方向性というものが打ち出されています。しかし、中体連というものがあって、学校ごとに参加する従来のやり方が残っており、そういう根本的な考え方が変わらないと、改革はなかなか難しい部分があります。

ひとつひとつ真剣に働き方改革に取り組んでもらいたいと思えます。

(赤地教育長)

先ほどの女性教諭の一日を拝見すると、皆さん驚くと思えます。こういうことを一年間通してやっているのは超人的だと思うかもしれません。しかし、校長先生に、今、学校の先生方は大変で困

っていますかとお聞きすると、市内の小学校9校のうち、7校の校長先生は世間が言うほど大変ではない、とお答えになります。

中学校も4校のうち、3校の校長先生が同じことを言っているのが不思議です。

宮入委員がおっしゃったように、子どもたちのためにやっているということと、子どもたちが成長することの喜びというものが、先生たちにとって大きいのではないかと私は思います。

(岡田市長)

今話を聞いていて感じるのは、先生のすごさ。宮入委員がおっしゃっていた、そんなにきついなと感じていなかったということが、おそらく先生方の実態なのでしょう。

先生方は、教職を選んだ時点で、そういう仕事だと覚悟しているのか、人間を育てる職業だからということなのか、私は経験がないもので分からないが、すごいと思います。

そういった中で、果たして先生方の意識改革はどこまでできるのか。

先ほど、坂本委員がおっしゃったように、満足度の高い生活ができるのかということですが、現在の状況に満足している先生が、中にはいるのではという気がします。

私が、働き方改革をしなければいけないと思ったのは、もしも先生の中で体調を壊す方が出てきた場合に、子どもたちにも悪い影響を与えると思うからです。そういうことがないように、先生方が毎日、元気で授業をしてくれる環境を作った方が良い。そのためにはどうすれば良いのか。

行政が、サポートする先生方を市費で増やせば良いのか。どうやって解決したら良いのかが非常に難しいです。先生方が今どのように思っているのか分からないことも、この議論をする上で、非常に難しいことであると思います。

青木教育指導幹、先生方がどう考えているのか、意向を確認したことはありますか。

(青木教育指導幹)

自分もそうだったが、今の先生も、子どもたちのために明日の授業の準備をすることが当たり前で、あまり苦痛を感じていないところがあります。それで勤務時間が延びてしまったりもします。

(岡田市長)

そういうことであれば、働き方改革のやり方によっては、教員の意欲をそいでしまいかねないのではないかと。

(中村教育委員)

先生になった方の意識は、今話にあるような傾向が強いと思います。ただ、教員養成課程の大学の志望率がピーク時から10分の1位になっています。つまり、教員志望がない。また、教職課程をやめてしまう学校も出てきています。

それは、学校の先生が、なりたい職業ではなくなっているからです。一つには競争率が激しすぎる。それと、責任が重くて給料が良くないということも、次の世代が心配しています。

同じことは保育士、幼稚園教諭でも言われていました。しかし、待遇が悪いと叩かれたため、長野県でも平均で2万円くらい最低賃金が上がりました。その結果、また盛り返してきました。

やはり、社会全体の流れというか、若い人たちの職業観というものと、教員の社会的使命と言う

ものの兼ね合いがなかなか難しい。そのうち教員のなり手がいなくなって、困るのではないかと心配しています。

(岡田市長)

確かに、教員のなり手不足についてはすでに言われています。

(宮入教育委員)

我々が教員であった頃に比べて、教員の配置はきめ細かになっています。昔は担任がすべてやっていました。

(青木教育指導幹)

千曲市は、非常に手厚くやって頂いていると思います。

学校の司書は全校に配置。事務員は大規模校の埴生小学校と戸上中学校に配置しています。支援員は42名配置しており、合計で3万3千時間になります。

また、大変ありがたいことに、講師を8名配置してもらっています。特に、小規模校に理科専科の先生を置いてもらっています。13学級以下だと、専科の先生が1人しかつかないため、多くの学校が音楽の先生を配置します。そうすると、理科の先生をつけることができません。しかし、千曲市では八幡、更級、上山田小学校に講師を配置して頂いています。

そのほかに、様々な教育課題に対して、それぞれの学校で講師を配置して頂いています。また、中間教室に適応指導員を合計5名配置して頂いています。全部数えると70名でした。

一方で、県の方も昔に比べると、きめ細やかに、学習習慣形成とか、少人数学習とか、LD等通級教室、ことばの教室、英語専科、スクールサポートスタッフ等、合計30名配置されています。

これら職員のすべてがフルタイムというわけではありませんが、以前に比べてきめ細かい配慮をして頂いています。

(宮入教育委員)

かなりきめ細かな対策がとられている一方で、道徳や英語の教科化で今まで以上に教科が増えてきており、それが負担になっています。

(青木教育指導幹)

外国語指導が入ったことで、多くの学校が毎日6時間授業になりました。それまでは水曜日が5時間授業であったりしました。毎日6時間授業だと、1日が過密になります。先生方も多忙感があるし、子どもたちも大変ではないかと思えます。

夏休みを長くしないで、そういう所にうまく振り分けて、日々の日課にゆとりがあった方が良くはないかと個人的には思います。

(岡田市長)

夏休みの時と、普段の時の仕事量に違いはありますか。夏休みは毎日来なければならないのですか。

(米澤教育指導幹)

夏休み中は原則暦通りです。ただ、行事や、緊急な相談業務で超過勤務があった場合に、割り振りで休む制度になってきました。しかし、前後4週ずつしかできないという制度であり、うまく制度が生かせません。前後8週にするなど制度を変えてもらったりすると良いと思います。

(赤地教育長)

今、市長がおっしゃったことは、国でも変形労働時間制という制度を作っていて、夏休み等の暇なときに休みましようとなっています。

(岡田市長)

制度はあっても、特に小学校の先生などは、子どもたちになつかれてしまえば休みにくい。

(坂本教育委員)

この問題を考えるときに、教職員の方はどんな考えを持った方なのかということを考えなければなりません。

教育現場を見て感じるのは、先生方は、逆算の哲学を持っていないように思います。

我々は、普段仕事よりも遊びや日常の付き合いなどを優先することも多いですが、それは、経験的にそちらの方が効率的とわかっているからです。時間は限られているので、常に逆算をしていないと仕事をこなせない。

たとえば、時間がなくて教材の準備が満足でなかったとしても、先生の目標は子供が満足するかどうか。綿密に用意した教材を出すことが目標ではないはず。

先生方からは、そういった発想が見えてこないことから、どのような考え方をしているのか確認をしていかないと、働き方改革を進めていく戦略が生まれてこないと思います。

そういった意味では教職員にとっては、働き方改革というより、生き方改革という名称にした方が良いのかもしれないと思います。

(岡田市長)

仕事にメリハリがないと次のステップに進めない。ストレスがかかってはいけない。一方で、先生方がこのような時間の使い方をしているのは、もしかしたら、子どもたちと接することで、メリハリがついているのかもしれないと思います。

仕事をして満足するということがあります。達成感があって次の仕事に進む。先生たちにとっては、子どもたちに接することで、新たな発見があり、それがストレスの解消につながる、それが楽しいということなのかもしれない。

もしからしたら、先生方は映画を見たり音楽を聴きに行ったりするよりも、学校にいる方が楽しいのかもしれない。

(若林教育長職務代理者)

授業が思い通りにいかなかったということがあっても、それが次の原動力になります。先生方は本当に子どもが好きでやっています。そういう気持ちが伝わってきます。

やりすぎて疲れることもあるでしょうが、子どもたちがかわいくて、子どもたちの成長のひとつひとつが彼らの原動力となっています。

けれども、長時間労働への改革ということで、それはそれとして時間の管理は必要です。

(岡田市長)

教員のなり手がいなくなることは困る。日本の教育そのものが、どうなるかも分からない。それを考えたら、働き方改革をする必要があります。

少なくとも、国の言う標準の労働時間、あと月 10 時間を軽減することができるのか。

(宮入教育委員)

長野市の西部中での取組が記事に載っていました。朝の活動や清掃のやり方を改めて、終業時間を 35 分早めました。それで、個別指導や、生徒会活動、部活動に使える時間を確保しました。

短時間の会合をこまめに行う、週一回の職員会を減らす、毎朝 10 分の全校読書や、昼食、清掃の時間を短縮することで、ゆとりを生みだしました。

そうやって少しずつ時間を見出していくことはできます。学校独自の努力も必要です。

(中村教育委員)

いわゆる主体的、対話的でより深い学びという話を先生方としているが、ほとんどの先生方の反応はあまり芳しくない。

最近、教えない教え方という考え方が教育専門家の中で言われています。授業中に、一番苦勞をして汗をかかなければならないのは、先生ではなく子どもたち。その準備をするのが先生です。少しずつこれから浸透していけば良いと思います。

先生方は、教えることが自分の仕事であると考えているため、教えない教え方はなかなか分かってもらえません。

教員志望者が減っているという件について、教員になった方になぜ教員になったか聞くと、全員が学生時代に良い先生に巡り合ったからと答えます。

なので、先生方が疲れていたりして、子どもたちに良くない影響を与えるようなやる気のなさが出てきてしまうと、大きな問題が出てきます。

そういった意味で、現在先生方がご苦勞されていることが、長い目で見て、実を結ぶと思います。

あまり急激にはできないが、人員を増やすとか、先生方と話をして、教えない教え方などを徹底していくしかないかと思っています。

(岡田市長)

学校が魅力ある現場になれば、教員の希望者は増えていくと思います。それは行政がやらなければならないことです。

学校ごとに課題は違うのかもしれないが、行政が支援して、ある程度人員を配置すれば、どの程度解消できるのかということ。学校側でも、少しずつカリキュラムを調整してもらおう。そして何をその人にやってもらうのかを考えます。

事務職を各学校に配置すればそれで良いのか、その事務職が行ったときに、学校現場がどうなる

のかを考える必要があります。

各学校で何が一番先生の負担になっているのか。教育すること以外の負担はなるべくなくすべきです。

たとえば、給食費の徴収は市でやることになったが、他にも市や教育委員会が受けた方が良い仕事があるのか。

そういったところを含めて、各学校で勤務時間を削減するには何が必要なのか、どうすれば良いのか、何が足りないのか、市が何を用意すれば良いのか、あるいは学校側の工夫によって削減できるのかを改めて確認すべきです。

教科が増えると、どうしても勤務時間が長くなります。そうすれば、仕事はまたハードになります。

英語の教科化ということについては、保育園の子どもから英語に親しむ環境を整えるため、八幡保育園にALTを派遣する試みを行いました。今年は全保育園にALTを派遣して効果を検討してみようと思っています。

長野県内では、保育園と連携したこういった取り組みを行っているところはないため、結果が良ければ、千曲市は保育園から英語に親しめる環境を作っている市として、一つの特徴をもつことができます。そのために、まずは一年間試してみます。

英語教育が小学校三年生から入ってくるので、その時にできれば良いと思います。

これからは、人に対して投資をするという時代になっていきます。千曲市も合併して15年たち、大きなハード事業もなくなってくるため、そういったところにシフトするのが良いと思います。

今年やってみた結果を、また総合教育会議でお話しできれば良いと思います。

いずれにせよ、この問題はすぐに解決できるものではない。今回のところは、青木教育指導幹の調査と皆さんの認識を会議で共有したとご理解頂きます。

この次は、各学校現場が果たしてどこまでこういった改革を、校長を中心としてやろうとしているのか確認します。また、何が必要な支援なのかという現場の声を集めながら、皆さん方と検証を行い、千曲市独自の教育改革、あるいは働き方改革ができれば良いと思います。これを次の課題として進めていかなければなりません。

それともう一つ、この総合教育会議の中で、教育委員さんの方から、こういったことを行政と教育委員会でやった方が良いということをご提案して頂きたいと思います。

子どもたちの教育なので、行政も教育委員会も一緒になって、束になってあたらなければなりません。

そのための知恵を私どもに貸して頂きたいと思います。

4. 閉会

議事録署名人

市長

教育長
